

いつか花咲くときが 来る(こともある)



東江一紀

年間も、大洋ホエールズ、横浜ベイスターズを応援し続けてきた。

しかも、毎年毎年、シーズン前には、今年が優勝だと言いつけてきた。「狼が来た」と何度もほらを吹いて蟹蹠を買った羊飼いの少年の比ではない。

って、いばってちゃ困りますが、こちらとしては、ほらを吹いているつもりなど毛頭なく、そのたび本気で、いくらなんでも今年が優勝してくれるだろうと思っていたのだ。

とはいえ、三十年以上も裏切られ続けると、知らず知らず敗残者のポーズとも呼ぶべきものが身につく。優勝してくれという真摯な願いを、心の奥の底の隅の陰のへりのほうにしまい込み、「いや、いや、もちろん、冗談っすよ」というへらへら笑いで周囲の白々とした視線に迎合してしまうのである。

ま、防衛本能ですわね。今年もだめだったという心の傷をできるだけ浅くするために、期待の位置エネルギーをあらかじめ低く設定しておく。明るく開き直れない弱者の、なけなしのプライドというやつだ。

例えば、一昨年のシーズン、ベイスターズは開幕から快調に突っ走り、結構長く首位の座にいた。年季の入ったベイスターズ・ファンは、「今年こそ」と期待を募らせながらも、一方では凋落に備えて、ちゃんと心の準備を

いやあ、泣けましたねえ。

十月八日二十時五十六分、大魔神の投ずるフォークに、タイガース新庄のバットが空を切り、わが横浜ベイスターズがリーグ優勝を決めた瞬間――。

この歳になって、うれし涙などというものを流せるとは思ってもいなかったが、目頭が

たちまち熱くなって、視界がぼやけてくる。

鼻の奥がつーんとして、瞼がしょっぱい感じ。相手構わず、「ありがとう」と言って、抱き締めたくなる。

なにせ、三十八年ぶりですもの。

小学校三年で、あの強いメガトン打線に恋をして以来、四十七年の人生のうち三十八

整えておく。

案の定、いったん勢いを失うと、ずるずる後退し、終わって見たら、Aクラスさえ確保できずに、五位である。ほうら見てごらん、って、これじゃあ、保険に入ったから怪我してよかったねと喜んでいようなものだ。

去年は逆に、前半振るわず、中盤から調子づいて、八月下旬、首位ヤクルトに三連勝。二・五ゲーム差まで迫った。

このとき、修行の足りないわたしは「次の巨人戦で三連勝したら、人生観が変わるかも……」と口走って、同病の同業者・K田S平さんに「一勝でもできたら神様に感謝しよう、という謙虚な気持ちでいなければ」とたしなめられた。

同じく同病の同業者・Y田K美子さんも、「優勝争いに絡んでいるというだけで、胸がキーンとしてしまいます」とコメントし、それ以上を望んだら罰が当たるといふ態度を崩さなかった。

謙虚。温順。これが、ベ이스ターズ・ファンに共通する気質ではないかと思う。長きにわたる鼻負チームの低迷は、ファンの性格もゆがめてしまうのだ。知らず身についたへらへら笑いは、「気のいいやつ」という役回りだからうじてリーグにぶら下がるベ이스ターズの地位を反映していた。

それがまあ、今年は、どうしたというんでしよう。勝ちかたの見本帳みたいに、どんなパターンでも勝ちちやう。

じつは、うちにはこの十四年間、テレビというものがなくて、ここ数年は球場へ行くような時間もなくて、プロ野球の結果は翌日の新聞で知るだけだったのだが、今年はどう、さすがに辛抱たまらず、六月にテレビを買いました。

球場にも、久々に足を運びました。九月末の大詰めのヤクルト戦、K田さん、Y田さんといっしょに神宮で観戦して、鈴木尚典の決勝スリーランにしばれました。大ウェーブにも参加しました。

おお、こうして見ると、ベ이스ターズ優勝は、局地的とはいえ、やはり日本経済に貢献してるじゃないの（K田さんはベ이스ターズの帽子を買ったし、Y田さんはゲンをかついで崎陽軒のシューマイを持参してきたし）。

なにせ、三十八年ぶりですもの（ははは、こればかり）。

だって、三十八年ぶりの優勝を味わうには、最低でも三十八年かかるんだからね。ほかのどのチームに、こういう偉業が達成できる？（あ、今ちよつと、千葉ロッテの名前が頭に浮かんでしまった）。

ここで、三十八年ぶりの優勝というのがど

れぐらいすごいことなのか、数字で検証してみたいと思う。

各チーム均等にチャンスがあると仮定して（この仮定にそもそも無理があるような気もするが）、リーグ優勝する確率は六分の一。優勝できない確率は六分の五ですね。

三十七年間優勝できない確率は、さいころを振って三十七回連続で一の出ない確率に等しい。すなわち六分の五の三十七乗。

手もとにある十桁の電卓で計算したところによると、ふうむ、約一・三パーセントか。今ひとつ、感動に乏しい数字だな（とほほ、計算しなけりやよかった）。いや、待てよ、三十七年間優勝できなかったチームが三十八年目に優勝する確率となると、これに六分の一を掛けるわけだから、約〇・二パーセントだ。

だいぶよくなってきたぞ。って、おい、おい、それじゃあ粉飾決算でしようが。

では、口直しに、わたしの訳した本が五十年連続でベストセラーを逃す確率を……ああ、華やいでいた気分が、どんどん暗くなっているなあ。

ま、志を持ち続けていれば、いつか花咲く日が来るのだと、ベ이스ターズは教えてくれた。問題は、寿命が尽きると花が咲くのと、どちらが早いことだけで……。